

大島紬絣文様集Vol.06割込柄の発刊

企画支援部奄美市駐在 ○徳永嘉美

1. はじめに

大島紬の絣文様は、世界に類を見ない精緻で独特なもので、その絣から生み出される文様は地域の文化であり、先人から受け継がれてきた歴史的な遺産でもある。当センターでは、これらの絣文様を調査復元し体系化を行っており、これまで絣文様集として、小柄（伝統柄）、小柄（無銘柄）、小中柄（飛び柄）、小中柄（地詰柄）、そして割込柄を刊行してきた。本年度は先に発刊した基本形を中心とする割込柄に引き続き、17の種類に分類316柄を復元し、大島紬絣文様集Vol.06割込柄として発刊した。

2. 研究概要及び結果

2.1 大島紬絣文様割込柄について

日本各地の織物産地における絣文様は、少なからず南より伝播された琉球絣の影響を受けている。それに対して大島紬の絣文様は、明治になり絣締め機の発明で独特な文様が生み出され、世界に類を見ない精緻な絣文化を育むこととなった。絣締め機の開発当初は小柄しか製造できなかったが、緯絣の交代締めが考案されると徐々に柄が大きくなってきた。小柄の次に登場したのが小中柄（飛び柄・地詰柄）であり、そしてさらに割込柄へと進化した。割込柄はその名のとおり、通常の絣配列である絣糸2本（1元絣）の繰り返しに変化を加えて、絣糸1本（カラス絣）を割り込ませたものである。従って、絣糸は2本と1本、そして同じように地糸においても2本と1本の繰り返しとすることで、柄に造形的な深みをもたらしている。割込柄は線を中心とした長絣を基本とするデザインであるため、この太い線（絣糸2本）と細い線（絣糸1本）を組み合わせることで、絶妙に絣表現された造形美を生みだし高品位なデザインが創作された。大正末期から昭和中期まで盛んに造られ、その人気の高さから他産地の模倣に遭い、特に線絣を得意とする村山大島紬が主にその対象とした。このことがきっかけで、昭和28年に総蚊絣方式へ大転換することになり現在に至っている。その後割込柄は急速に廃れることになるが、古典をイメージする大島紬として現在でも一部製造が続けられている。発刊した絣文様集と内容の一部を図1に示す。



図1 大島紬絣文様集割込柄

2.2 コンピュータによる仕上がり想定

本集は大島紬専用CADの旧機種と新機種を連動し仕上がりを想定する手法を用いた。印刷原稿を作成するには、旧機種で作成した絣データを新機種へ移動し画像化する必要がある。その際、画像の劣化が起こったが、画面表示の倍率を最大限（10倍）にし画像化することで解決した。

2.3 コンテンツ

割込柄は小柄のように名称がないので、まず小中柄、中柄、大柄に大別し、それぞれの図柄構成要素別にまとめて図録した。コンテンツと仕上がり想定図の一部を図2に示す。

コンテンツ	仕上がり想定図		コンテンツ	仕上がり想定図	
小中赤十字			中・風車		
小中風車			中・花		
小中花			中・ワツ葉		
小中亀甲			中・割付け		
小中道引き			中・地詰め		
小中ワツ葉			中・地空き		
小中地空き			大・地詰め		
中・赤十字			大・地空き		

図2 コンテンツと主な仕上がり想定図

3. おわりに

割込柄は、小柄・小中柄・中柄・大柄に分類され、大柄については自由曲線による大和絵柄も多く製造されてきたが、ここでは文様の要素のある柄を選定した。今回も緋文様復元にあたっては、業界の大島紬デザイナーの方々に、多大な協力を得たことに謝意を表す。